

飛 龍

FLYING DRAGON

日本香港協会ニュース No.74

香港とクール・ジャパンの可能性 (流行から見る日港50年)



【写真説明】

80年代当時、香港で発行されていた人気雑誌「好時代」と「Young Beat」。欧米と日本の音楽芸能情報がほとんどで、日本の情報が非常に多かった。表紙はそれぞれ中森明菜と河合奈保子。当時、彼女たちは香港でもアイドルだった。



メディアコーディネーター/Nikkei Gallery編集長 佐保暢子

最近、「クール・ジャパン」をスローガンに日本のソフトパワーを海外に発信する動きが盛り上がっているが、香港は発信先として最適な場所と言えるだろう。

1980年代まで戒厳令下にあった台湾や国外の情報が制限されている中国と違い、香港は政治的に日本文化が拒否されることはなかった。特にテレビ放送が本格的に始まった1960年代から返還前の90年代前半にかけて、香港メディアのコンテンツ不足を補うように、日本のテレビ番組やアニメが香港に流入した。

現在50代の香港人は「二人の世界」、「サインはV」、「俺たちの旅」などを思い出すドラマに挙げ、沢田研二、西城秀樹が彼らの往年のアイドルと言う。40代は「ウルトラマン」、「仮面ライダー」、「ガンダム」などを観て育ち、安全地帯を聴いて、近藤真彦や中森明菜に憧れた世代だ。30代は「ロングバケーション」などのTVドラマで日本を知り、アイドルと言えば木村拓哉などジャニーズ系。20代も日本のアニメを観て育った世代である。香港は日本の流行文化に触れて育った世代が幅広い。

こうした背景から日本通の文化人や、日本の流行文化を積極的に取り上げるメディアが少なくない。ここ数年、香港から日本の作家、漫画家、ファッションデザイナーの取材依頼が増えている。実際には取材を受けてもらえないことも多々あるが、全く相手にされなかった昔に比べれば日本は寛容になったと香港のメディア関係者は言う。彼らは誰よりも「日本通」であることが求められ、誰よりも深い日本情報を発信することに力を入れている。その「日本情報」はネットなどを通じて中国などにも伝わる。香港は今や日本文化の寛容な受け手であるだけでなく、再発信の場にもなっている。

先日、香港のテレビ局から東京でのロケ・コーディネート依頼を受けた。東京のほか、ソウル、上海、シンガポールの最新トレンドを紹介する娯楽情報番組だが、東京編の説明の中に「80年代日本へのトリビュート」という言葉があった。リポーターは1980年代生まれの若い香港人タ

レントで、撮影クルーも多くが若い世代だ。日本の黄金時代を知らない「八十後(1980年代生まれ)」がバブル崩壊後も憧れの対象であり続ける東京を紹介することが中心テーマになるという。

日本では、バブル時代にあまり良いイメージがないが、バブル当時の日本は香港でどう見られていたのか。当時の人気歌手兼俳優の許冠傑(サミュエル・ホイ)が作詞作曲したポップソング「日本娃娃(日本の女の子)」(1985年)には、こう描かれていた(以下簡訳)。

——東急(尖沙咀にあった日系デパート)で中森明菜似の日本人女性に会って一目惚れ。「私は香港のマッチ(近藤真彦)です」とデートに連れ出す。トヨタに乗り、大枚はたいて寿司や天麩羅をご馳走。彼女と結婚すれば、97年も大丈夫。原宿で寿司バーを開こうと夢を描くも、剣道の達人だった彼女の父が娘に手を出すなど激怒。涙を飲んで「Sayonara」——

東急(消費)、マッチと明菜(芸能・アイドル)、トヨタ(日本車)、寿司と天麩羅(和食)、剣道(伝統)……当時、社会現象にまでなった日本の「魅力」を示すキーワードがすべて歌詞に込められている。

今、このキーワードの中には以前ほど勢いがないものもある。韓流や中国、台湾の勢いも増し、香港の若い世代と上の世代の間で、日本に対するイメージのギャップが広がつつあるという。ただ、香港の「八十後」が日本の80年代をトリビュートするという企画が出るように、日本のソフトパワーは今も引き継がれているようだ。この流れが途切れないよう大事にしていきたいものである。

目次

2013年8月 発行

香港とクール・ジャパンの可能性 (流行から見る日港50年)..... 1
 香港生活のはじめに寄せて..... 2
 香港財界人との交流(3) Frank Tsaoさんのこと 3
 今も昔も香港映画(下)..... 4~5
 連合会・各協会便り
 連合会：第10回アジア・フォーラム in 沖縄」開催報告、
 CMMS第10期修了式のご案内、
 2013年香港フォーラムのご案内 6~7
 東 京：第2回「香港キッチンカフェ×食文化探訪講座」、
 第20回横濱ドラゴンボートレース2013、
 恒例の七夕パーティーを開催 8

関 西：文化庁セミナー開催、
 「アジア・フォーラム in 沖縄」を楽しむ 9
 中 京：南ア旅行雑感 10
 九 州：平成25年度通常総会・後援会・懇親会開 11
 山 形：日本語スピーチコンテストに出場 12
 北海道：「香港金融セミナー」を開催 13
 宮 城：「2013春節セミナー&パーティー」、
 平成25年度通常総会&記念セミナー、懇親会 14
 沖 縄：アジア・フォーラム in 沖縄開催 15
 広 島：平成25年度 通常総会・講演会・交流 16
 新 潟：新潟日本香港協会が設立、香港ビジネスセミナーを開催 17
 CONRADホテルのお知らせ 18



香港生活のはじまりに寄せて

MOL Liner, Ltd 齋藤 恵

2011年夏より香港駐在となりました。日本の物流企業で働いている私は所属部門の本社機能移転に伴う異動のため、これから長いお付き合いとなるのでしよう。私のDiscover Hong Kongはまだまだ道半ば、語れることは多くありませんが、感じていることを少しご紹介したいと思います。

在住経験のあるほとんどの方が感じている、もしくは在住経験がなくても想像に難くないかと思いますが、現在の香港は、間違いなく日本人にとって住みやすい都市の一つといえます。生活の大前提となる治安・水・食べ物について、気を遣うことはほとんどありません。交通機関も非常に発達しており、どこに行くにも短時間。日系のデパート・スーパーもあり、簡単に日本の製品・日本の食材を手に入れることができます。目が慣れて来ると、近所の個人商店にさえ日本製やそれに類する品々が並び、たいていの日本食材は現地スーパーでも十分揃うことに気がつきます。外食文化が浸透しているので、いたるところに中華のみならず東南アジア料理の気軽な食堂があり、またほとんどのお店がテイクアウト対応をしてくれるのもありがたいところ。暑いだけかと思っていたら、実はなんとなく四季も感じられ、都会の喧騒のすぐ裏手から緑の山々につながり、少し奥に入るだけで高層ビル群とネオンの灯りとは全くの別世界が広がります。香港人の同僚から「日本が恋しくないか?」「何か不自由していないか?」と尋ねられますが、考えるまでもなく「ノー」と言えるのは、赴任してからの時間が短いからだけではないでしょう。しいて言えば、日本の真冬のような澄み切った青空が恋しいというところでしょうか。

自分の生活も徐々に落ち着き、ようやく周囲に目が行くようになった頃、まず驚いたのは、公共交通機関を利用していると、若い世代がためらうことなくさっと立ち上がり、お年寄りや小さなお子さん連れの家族に席を譲る姿を、本当に良く見かけることでした。香港人の同僚にそのことを絶賛すると、「当たり前でしょう、いったいそれの何をそんなに驚いているの?」という反応。東洋の

美德の一つである長幼の序が、いまでもしっかりと息づいていることを感じた瞬間でした。

また、例えば混みあったエレベーターや電車・バスなどから降りるために人をかき分ける時、ほとんどの日本人の場合、「すみません」と言ってから「降ります」と言うかと思えます。香港人も、日本語のこの「すみません」にあたる「唔該、」と言ってから「降ります」を続けます。面白いことに、中国語にはこの用法にあたる「すみません」という言葉はないそうです。おそらくですが、英語の「Excuse me,,,」から来ているのではないかと想像しています。

香港といえば、英国植民地時代の歴史を抜きに考えることはできません。あるガイドブックは、香港を次のように表現しています—約160年にわたりイギリスの植民地であった香港は、東洋と西洋が混在した 独特の雰囲気をもつエネルギーでエキサイティングな都市—。「東」と「西」が会合する都市というのは世界にいくつもあって、皆さんもすぐに2つ3つ思いつくのではないのでしょうか。しかしながら香港は、同じEast meets Westの都市でも、そこで異文化が出会い時間を掛けて融合し独自の姿を現してきたものとは、少し異なるところにあるような気がします。

160年という英国支配の歴史は、二つの文化が交じり合うには十分な、溶け合うにはいささか不十分な時間で、だからこそ、東洋と西洋が薄く重なり合い、それぞれがそのままのかたちで同時に存在する、「融合」ではなく「混在」こそが、香港の香港らしい所以なのかもしれません。その意味において、かのガイドブックは、非常に正確な表現をしたと言えるでしょう。

1997年の返還から15年が経ち中国政府の影響も徐々に強まり、多くの人々がいまだ自らを「香港人」とする一方で、「香港人」から「中国の香港人」と捉える人々の割合が増えているそうです。この流れの中で、香港という稀有な文化を抱く都市は、これからどう変わっていくのでしょうか。



香港財界人との交流 (3) Frank Tsao (曹文錦) さんのこと

日本香港協会会長 賤前 宏

香港海運業界を代表する人物は数多いが、C.Y.Tung(初代行政長官のC.H.Tungさんは長男)、Y.K.Pao、Frank Tsaoの3人を挙げる人が多い。Tung氏とPao氏は既に亡くなり、Tsaoさんはいまだに健在で数年前までは日本にも時々来られたが、最近健康診断で米国に行かれるくらいで引退生活を楽しんでおられる。私はパームオイルの取引とか会社のマレーシア支店の後ろ盾でもあるシナール・ベルリアン社の実質パートナーがTsaoさんでもあることから香港時代もお付き合いがあったが、後年、東京に戻り日本香港協会理事長の時に来日の都度、声をかけて頂いた。新橋のTsaoさんの会社IMC(International Maritime Carrier)所有のビルの一角にある中華料理店で昼食を食べながら中国情勢などを議論した。私が香港にいたころは世界的な海運不況の時代で多くの香港船主も多大の損失を蒙ったが、IMCは無事不況を乗り越えた。成功の秘訣を聞いても簡単には答えられないと言いつつ、銀行から多額の借り入れをしないことと投資をできるだけ分散することを挙げて居られたが、実に多方面に投資をしている。船主として香港で巨大な輸送船団を持つとともに、マレーシア、タイなどでも船会社に投資し、コンテナターミナル、造船所、倉庫と関連業界への投資までは理解できるが、その他マレーシアで紡績、染色、パームオイル、香港でセメント、シンガポールで国際会議・展示場(サンテックシティ)中国本土では工場団地、包装工場など私の聞いている限りでもこのほかに不動産、金融など世界中に投資先は広がっている。

Tsaoさんの別の投資は人材育成だ。上海交通大学の一角に海運技術と管理の人材を育成すべく上海船員育成センターを造った。そこで学んだ中国人をシンガポール、マレーシアに送り、実務経験を持った人材をIMC始め他の船会社に送り込むというものだ。彼は上海で生まれ祖父がハシケの運送業などをやっていたが父親が貿易業、銀行業、母親が宝石店など経営して上海でもかなり裕福な家庭で大学迄出たが、軍閥間の戦争、国民党と軍閥の戦争、日中戦争、国民党と共産党との内戦と戦争に明け暮れた毎日であったと話してくれたことがある。結局、共産党の支配下となり一族で香港に移った。但し、まだ若いころで生活は困窮のどん底でもあり、マレーシアで紡績工場などの経営にあたり苦難に満ちた生活であったようだがそこで大成功を収めマレーシア政府から最高の栄誉称号を授与されている。香港に一家で移住したときは人口80万位のところからたちまち数倍の人口を抱えるようになったという。

Tsaoさんは香港を弾丸の土地と言っていたが日

本流には猫の額のような意味であろう。上海に対する思い入れは強く何か故郷に残したいと考えたがまだ改革開放前で商売のタネになるようなものもなく、人材開発を考えたのかもしれない。上海出身の朱鎔基とも近いようであった。私の香港時代に新華社香港の社長(在香港中国大使のような立場)許家屯氏の講演を聞くように勧めてくれたのもTsaoさんだ。総商会の昼食講演会で話を聞いたが実に歯切れよく香港の将来について心配しつつ楽観的な話をしていた。曰く「中国側があくまでも香港に干渉しないことが重要」「中下層がすぐに政権につくことには反対、できれば大資本家が望ましい、中下層が政権につけば高福祉、税の引き上げに走る」「中央の各部門、地方の省・市が香港に人を派遣しようとしているが阻止できないまでも、彼らが特権を乱用しないように監督することが必要」などと共産党員らしからぬ発言をしていたが天安門事件後米国に亡命してしまった。昨今の香港政界に対する北京政府の対応などを見るとまさに正鵠を射た指摘であった。

さて、97年頃の話になるがTsaoさんは初代行政長官のC.H.Tungさんの推薦人の一人でもあった。香港の置かれた微妙な立場から同じ海運業界で世界各国に広範な知識と経験があるし、上述の許さんの発言とも一致するのでTungさんを担いだのだろう。

Tsaoさん自身もできれば香港のためにひと肌脱ぎたいとの気持ちがあったのかも知れない。私から見れば海運業のみならず広範な業種を難なくこなし、実業家でもあるが学者タイプの人で当然香港財界のリーダーシップを執るべき人物だが、船主協会理事以外主要な役職をやっていない。その理由は(私の推測だが)朝鮮戦争時、各国が対中封鎖を行っていた時にTsaoさん所有の船が物資を中国に運んでいたためアメリカでブラックリストに載り、対米交易が不可能となった時があったようだ。香港経済界は対米関係が最重要でもありそのような関係から主要な役職にはつかなかったのではないかと思う。

それにしてもマレーシアに始まり、タイ・シンガポール・インドネシア等アジア諸国はもとより日本・欧州・米国と世界中にネットを張り巡らせた人だ。シンガポールのサンテックシティ(大展示場)には特別の思い入れがあるようであったが、今やシンガポール港がアジア最大の港のひとつとなり、展示場ビジネスでも香港を凌駕するほどになったのはTsaoさんの努力が大きい。私がどの分野でも知っているが誤解して今でも彼の事務所経由いろいろ依頼を受けるが彼ほど広範に動いたわけでもないの期待に副えないことが多いのは残念だ。



今も昔も香港映画（下）

読売新聞元香港支局長 戸張東夫

今回はアクション映画以外のジャンルの香港映画について語ろうと思う。シリアスな社会派ドラマなどはいかがであろう。そういうと直ちに「香港映画にシリアスなドラマなどあるものか？」と反論されるかも知れない。だからこそこのジャンルを紹介しておきたいのだ。たしかにアクション映画以外の香港映画は製作本数が少ないし、内外の評価も定まっていなかったから、香港映画ファンでさえ見落としかねない。だがシリアスな社会派映画は、内容に応じてコメディやラブロマンス、必要とあればアクション映画の要素も大胆に取り入れて観客に考えさせるといった与えられた役割を果たしている。観客が映画を観て考えるかどうかは別の話である。また時には珠玉のような作品を送り出しファンを喜ばせているのである。

返還問題が生み出したシリアスな社会派映画

シリアスな社会派というジャンルは香港映画にはもともと存在しなかった。それが目立つようになったのは80年代に入ってからだ。なぜ80年代か？これには香港返還問題の影響が大きかったと筆者は考えている。

イギリスの植民地香港が1997年中国に返還され、すでに中国の「香港特別行政区」に変わったことはよく知られている。ここでは返還前の80年代初めに遡って話を始めたい。

一口に香港というが「香港島」、「九龍半島先端部」および香港全土の90パーセントの面積を占める九龍半島の付け根の部分「新界」の三つの地域に分かれている。前二地域はイギリスの領土だが、三つ目の「新界」だけはイギリスが期限付きで租借した中国の領土だった。この期限が1997年だった。香港住民にとって当時最大の問題だったのは、1997年以後香港がどうなるかわからないことであった。最悪の事態は中国返還だった。香港の人たちはこれを不安に感じていたが自分たちの力ではどうにもならない宿命であった。そこで誰もがこの問題を考えないようにして稼げる時に稼いで、いざという時に備えておこうという姿勢で日々の仕事に精を出していたのである。

ところが1982年9月サッチャー英首相(当時)が突然中国を訪れ1997年以後の香港の地位について交渉を始めた。これに伴い中国が香港返還を強く求めていることが初めて公式に明らかになったのである。香港住民の不安が一気に膨らみ、香港全土がパニックに陥った。中国不信、共産党独裁に対する嫌悪感、中国の統治下で自由や豊かな生活が失われるという危機感などがどっと噴き出した。香港は植民地でありながら祖国中国より一歩先に自由かつ経済的に豊かな社会を実現していたのだから、無理も無い反応であった。このような香港のパニック状態や人々の不安や反中国感情を香港映画も無視することは出来なかった。こうしてシリアスな社会派映画が登場したということなのである。

1997年以後香港はどうなる？香港住民はどうすればよ

い？というテーマを取り上げた作品がまず作られた。『望郷—ポートピープル(投奔怒海)』(許鞍華監督、1982年)、『ぼくらの町香港(家在香港)』(敬海林監督、1983年)、『風の輝く朝に(等待黎明)』(梁普智監督、1984年)などである。

『ぼくらの町香港』はパニックに陥った当時の香港の混乱と人々の不安を具体的に、丁寧に再現した。観客は他人事とは思えなかったに違いない。また映画は「香港はいまのままがいい。共産党の中国に渡さないでほしい」という香港住民の本音を大胆に訴えた。当時の香港の状況を丸ごと、真正面から取り上げた映画は後にも先にもこれだけである。香港映画史の中でもきわめて重要な作品である。だが残念ながら日本では公開されていない。

『風の輝く朝に』は日本軍占領下の香港の惨状と屈辱を語り、香港の中国返還後に起こるべき事態を暗示した。『望郷—ポートピープル』はタイトルからわかるようにベトナムの物語。ベトナム戦争終結後のベトナム共産党政権の恐怖政治、非人間性、腐敗、貧困などをダナンを舞台に報道カメラマンが暴露し、生き延びるためにポートピープルとなってベトナム脱出を余儀なくされる人々に共感と同情の目をそそぐ。ベトナムの物語とはいえ、中国と香港を語っていることは明らかであった。このため香港では上映禁止の処分を受けた。筆者も香港でこの映画を観ることはついに出来なかった。

中国への香港返還を恐れて多くの人たちが香港脱出や移民を考えたことは先の『ぼくらの町香港』でも語られているが、そういう人たちがビザの発給を求めて香港島セントラル地区のアメリカ総領事館に殺到する事態になった。この移民ブームを取り上げたのが『あの愛をもういちど(我愛太空人)』(羅卓瑤監督、1988年)である。

「家族持ち、が移民するときは、妻(子供も)を一足先に移民させ必要な手続きや安全な環境かどうかの確認をしてもらってから、夫が香港を離れ移民する、という手順をとる者が多かったという。夫が勤務していた職場を退職するか、長期休暇をとるかが当時しきりに論じられていた。それはともかく香港に一人残った夫を当時のマスコミは「太空人」と呼んだ。「太太」は中国語で妻、「空」は空っぽの意味。「太太」がそばにいない、「空」だ、空っぽだというしゃれである。当時の香港にはかなりの数の「太空人」がいたらしい。「太空人」は中国語では普通宇宙人、宇宙飛行士の意味で使う。この映画のストーリーは夫が先に移民し、一人香港に残された妻が「太空人」と浮気したこと、二つの家庭が崩壊してしまうというもの。タイミングのよいシリアスなテーマだったのに、どたばた喜劇のスタイルだったことから監督の真意が観客に伝わりにくかったのが難点である。

香港は、中国人の海外脱出の待合室とかファーストステップとか言われてきた。だから移民は常に香港の人の関心事だった。香港返還問題と直接結び付けない「移民

映画、も数多く作られた。思いつくままにテーマ別にいくつか紹介してみよう。

【移民先の出来事】①『非法移民』(張婉婷監督、1985年)②『誰かがあなたを愛している(秋天的童話)』(張婉婷監督、1987年)③『フルムーン・イン・ニューヨーク(人在紐約)』(関錦鵬監督、1989年)。

【中国人の流浪の人生】①『ラヴソング(甜蜜蜜)』(陳可辛監督、1996年)。

【帰国した移民の感慨】①『似水流年』(嚴浩監督、1984年)②『八両金』(張婉婷監督、1989年)③『グレート・ウォール(A Great Wall)』(方育平監督、1986年)。

ここに張婉婷監督の三作品が並んでいるが、同監督の移民三部作と呼ばれている。

ざっとこんなところである。香港返還と移民に関する作品と監督をこうして列挙してきたが、これらの監督は押しなべて「硬派、といてよいように思う(これが全てということではない)」。『郁達夫傳奇』(1985年)、『川島芳子』(1990年)の方令正と『つきせぬ想い(新不了情)』(1993年)の爾冬陞両監督も加えてもよいかもしれない。

香港の女性監督は社会派ドラマの主力？

ところで香港を代表する女性監督三人(許鞍華、羅卓瑤、張婉婷)が名を連ねているのはどういうことなのか。女性監督は社会派志向という「学説」を聞いたことはないから、シリアスな傾向の作品を作る監督を列挙してみたらたまたま女性監督が三人混ざっていたという程度のことなのだろう。経歴や生活環境に何か共通点があるのかも知れない。がここでは横道にそれないようにしよう。

三人のうち羅、張両監督は監督歴も長くなく作品も少ないから知名度もいまいちである。

だが改めて振り返ってみると二人の作品は確かにどれも観客に考えさせるテーマを秘めている。たとえば芸術映画にこだわるあの岩波ホールが上映した香港映画『宋家の三姉妹(宋家皇朝)』(1997年)も『玻璃の城(玻璃城)』(1998年)もともに張監督の作品だった。

前者は革命家孫文ら要人の妻として活躍した靄齡、慶齡、美齡の宋家の三姉妹を中心に激動の中国現代史を語っている。また後者は監督の母校、名門香港大学を舞台に70年代から中国返還までの香港を回顧した。

実は『宋家の三姉妹』のような中国の歴史を独自の視点から見直したり、歴史上の人物を再現するといったジャンルは香港映画が最も得意とする分野のひとつである。先にあげた『郁達夫傳奇』や『川島芳子』はもちろん、『レッド・ダスト(滾滾紅塵)』(嚴浩、1990年)、『ロアン・リンユイ 阮玲玉(阮玲玉)』(関錦鵬1991年)などの力作も忘れたい。このジャンルの作品には見るべきものが多い。

女性監督に戻ろう。許鞍華監督は1947年生まれ。先の二人より十年ばかり年長だ。監督歴も長く作品の数も多いし、コンスタントに活動している。ベテラン監督である。アク



許鞍華監督「桃さんのしあわせ」のDVDとジャケット

ションものも作ったし、千軍万馬が広大な中国の大地を疾駆するスペクタクル『清朝皇帝(書劍恩仇録/香港公主人)』(1987年)のような作品を手がけたことも。許監督は一時武俠映画で国際的に著名な胡金銓監督の助監督を務めていたこともある。とはいえ全体としてみればやはりシリアスな作品が多い。最近作った『桃さんのしあわせ(桃姐)』(2012年)にしても、どこの国にもある高齢者問題を取り上げている。昨年(2012年)10月東京で公開された。ご覧になった方も多いだろう。

これは香港のある家庭で60年以上住み込みのお手伝いさん(香港では阿媽と呼ぶ)をしていた広東人女性桃さんの晩年のエピソード。桃さんの働いている家庭は先ごろサンフランシスコに移民してしまったが、香港に一人残った未婚の息子ロジャーの世話をするのが目下の仕事。仕事の量は少なくなったが桃さんは高齢のうえ、病気で倒れたこともあった。そこで近くの老人ホームに入った。するとロジャーが頻繁に見舞いに来てくれるようになった。ロジャーは桃さんとおしゃべりしたり、散歩や食事に連れ出したり、自宅につれて帰ったりした。このためホームの老人たちがみな桃さんを羨ましがったほど。サンフランシスコからロジャーの母親が見舞いに来て桃さんを喜ばせたこともあった。お手伝いさんという身分を気にしないでもなかったが、桃さんはこうして家族の一員のようにみんなの愛情に包まれて、息を引き取った。

桃さんとロジャーの家族のようなケースは今の香港では想像も出来ない。70年代末ごろから中国人阿媽が姿を消し、広東語が通じないフィリピン人女性の阿媽が主流になったことも一因だが、要するに香港が変わったのである。阿媽が家族の一員だった香港の古き良き時代を、許鞍華監督は懐かしんでいるようなところが感じられないでもない。(了)

「第10回アジア・フォーラム in 沖縄」開催報告

香港貿易発展局東京事務所



インターナショナルミーティング後の集合写真



インターナショナルミーティングに聞き入る日本香港協会会員



仲井眞弘多・沖縄県知事の乾杯音頭



ディナー・レセプションで講演する濱下学院長

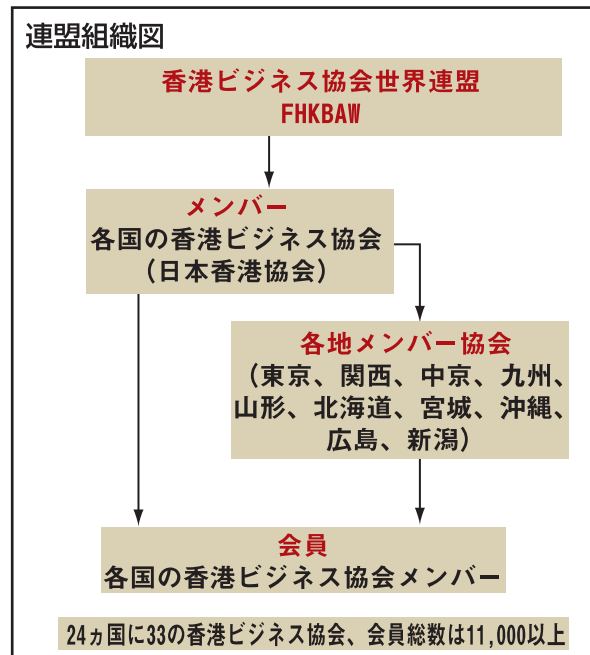
香港ビジネス協会世界連盟(FHKBAW:Federation of Hong Kong Business Associations Worldwide)が毎年開催する「アジア・フォーラム」が2013年5月31日、東シナ海に面した沖縄県北部の万国津梁館(名護市)で開催されました。地元沖縄をはじめ日本各地の香港協会会員、アジア各国の香港ビジネス協会会員の方々、計約130人が同フォーラムの活動に参加されました。

FHKBAWは日本香港協会など世界各国・地域の香港ビジネス協会を統括する組織で、アジア、豪州、北米、欧州の4エリアで年一度、フォーラムを開催しています。アジア・フォーラムは今年で節目の10回目を迎え、初の日本での開催となりました。

30度近い真夏並みの気温は南国沖縄ならではの。会場では、それに負けず劣らず熱のこもった講演が繰り広げられ、当初の雨模様も午後には上がり、会場の窓の外には美しい青い海が姿を表しました。

『沖縄入門—アジアをつなぐ海域構想』(筑摩書房、2000年刊)の著書もある中国広州・中山大学アジア太平洋学院の濱下武志学院長からは「アジア経済におけるチャイニーズ・ネットワーク～香港と沖縄の役割～」と題した基調講演があり、何世

紀にもわたり中国商人たちが築いてきたネットワークがアジアの経済発展において果たした役割と重要性、その中で香港や沖縄が歴史的にどう位置付けられているのかについて貴重なお話がありました。



その後の来賓の方々のご挨拶からは、口々に「ネットワーク」という言葉が上がり、まさに香港を拠点とするネットワークであるFHKBAWの意義について、皆さまが再認識される形となりました。

香港・日本経済委員会(JBCC: Hong Kong-Japan Business Cooperation Committee)の蔡冠深(ジョナサン・チョイ)委員長からは、日本で初めてのアジア・フォーラムの開催地が、沖縄という、日本と中国、そして東南アジアの交流の交差点とも言える場所になったことの意義が、香港が同じく域内の交差点の役割を担っていることに絡めて紹介されました。

日本香港友好議員連盟の自見庄三郎会長からは、香港空港で行われている日本食品の安全検疫を沖縄で事前に済ませることで、香港での検疫措置

を軽減、免除、解除する案を進めるために、日本経済団体連合会とJBCCが協力し、香港政府(食品衛生局)および日本政府(農林水産省、経済産業省)などに働きかけている状況をご報告いただきました。

琉球太鼓や琉球空手の実演を楽しみながらのディナーパーティーでは、ゴーヤーチャンプルー、沖縄そば、琉球炊き込みご飯といった郷土料理に舌鼓を打ちながら、活発な情報交換、文化交流が図られ、閉会予定時刻を過ぎては人の輪が消えずに残っていました。

翌日には、喜瀬カントリークラブでのゴルフ・プレー組と、美ら海水族館および首里城へのツアー組に分かれ、参加者同士の懇親活動も行われ、過去最大規模となったアジア・フォーラムの全プログラムが、無事に終了となりました。

CMMS第10期修了式のご案内

2012年9月より約10ヶ月にわたり開催された、第10期チャイニーズ・マネージメント&マーケティング・スクール(CMMS)は、6月6日に無事修了式を迎えました。

今期のCMMSも前期同様に東京と大阪の二会場をテレビ会議システムで結んでの同時中継で行われました。今期理論・実践編では受講者総数37名のうち全体の57%にあたる21名の方が、また語学編においては受講者総数15名中14名の方が、全講義に対し7割の出席率をもって無事修了と認定されました。さらには8名の方が皆勤賞を受賞されました。忙しい仕事の合間を縫っての本講座全30講座-毎週木曜日(語学編は全15講座を隔週火曜日)午後7時から9時までの2時間長にわたる授業を、10ヶ月間受けられた受講生の皆様の並々

ならぬ努力を伺うことができます。

修了式には手島茂樹二松学舎大学教授、牧角悦子二松学舎大学教授、原田光夫NPO日本香港協会理事長、古田茂美全国連合会事務局長をはじめ、モデレーターの藤澤慶彦氏、藤原弘氏が出席され、修了生へお言葉を頂いた他、原田理事長より修了証書と記念品が授与されました。今期は東レ、三井物産、蝶理、塩野義製薬、岡本無線電機、ユニオンケミカル、チョーヤ梅酒、新日本コンピュータマネジメント、ゴールデンケリーパテント香料、ノーブトレーダース、内外香料、弁護士、公認会計士(PwC等)、税理士等の方々を受講され、式の後半には修了生全員が、それぞれ約1分のスピーチで、この一年間の授業について思い思いの心情を語りました。

2013年香港フォーラムのご案内

今年で開催第14回目を迎える「香港フォーラム」は、2013年12月3日(火)～4日(水)の二日間に亘り、香港のコンベンションセンターにて開催されることになりました。

香港フォーラムとは、世界24カ国/地域に跨る33の香港ビジネス協会から構成される香港ビジネス協会世界連盟(Federation of Hong Kong Business Associations Worldwide)の全メンバーが一堂に会する年1回の世界会議です。香港そして香港を通じての中国本土についてはアジア諸国への熱い想いを胸に秘めた方々の結集です。

また、「香港フォーラム」に先立ちまして、毎年恒例の「全国協会交流会」を開催致します。香港での年に一度の交流会には、日本全国から毎年100名以上の会員様にご参加いただいております。是非皆様方のご参加をお待ちしております。

＜問い合わせ先＞
日本香港協会 全国連合会(担当:陳・室田)
TEL:03-5210-5901
FAX:03-5210-5860
Email:national@jhks.gr.jp

イベントの詳細、2013年フォーラムのご案内については下記のURLよりご覧いただけます。

<http://www.hkfederation.org.hk/forum/forum2013/main/index.asp>

TOKYO

NPO法人日本香港協会

第2回「香港キッチンカフェ×食文化探訪講座」 あの人気香港スイーツが登場！ 女子プロジェクト「バウヒニア会」

前回参加者のアンケートでリクエストの多かった香港スイーツ2品を、櫻井景子先生に学びました。失敗しないで作るコツはもちろん、おいしいマンゴーの見分け方や、お料理のプロセスに便利なキッチン用品の使い方についても役立つ情報を教えていただきました。

また、香港から取り寄せていただいた本格的なジャスミン茶「龍珠香片」のおいしい淹れ方や、良いお茶の見分け方を、中国茶教室を主宰する太田良子氏(当日本香港協会・理事)に学びました。

試食会では、香り高いお茶を味わいながら、フレッシュな爽快感が残る楊枝甘露と、ナッツの香ばしい上品な甘さの白玉団子をいただき、楽しいひと時を過ごしました。参加者からは「こんなに簡単に香港と同じおいしさの楊枝甘露が味わえるなんて！」というご感想を多数いただきました。お料理講座終了時には、櫻井先生お手製の香港の街角スナック「茶葉蛋」の嬉しいお土産も！

■今回のメニュー:

楊枝甘露
タピオカとポメロ入り
ミルクマンゴー
スープ



糖不甩・・・ナッツとココナツの白玉団子

■開催日:5月19日(日)

第20回横浜ドラゴンボートレース2013



先頭を行く日本香港協会チーム

日本香港協会は香港太平山會(日本在住の香港人の会)と混合チームを組んで6月2日のレースに出場。上位入賞はならずも例年を上回る好タイムで大健闘。レース後は香港から特別参加したThe Team Hong Kongの若き精鋭を招いて横浜中華街で打上パーティを開催。香港経済貿易代表部(ETO)

のローラ・アロン代表の出席もあり大いに盛り上がり、日港市民交流・親善を深めた素晴らしい一日となりました。



チーム香港と日本香港協会の役員たち

恒例の七夕パーティーを開催

7月10日(水)夕刻より東京・千代田区永田町にある上海大飯店にて恒例の七夕パーティーが開催されました。総勢約80名の会員が参加し、盛会でした。食卓には、お店の計らいで珍しい野菜「苺菜(インチョイ)」が出されました。「苺菜(インチョイ)」は、「芥蘭(カイラン)」同様、香港で人気のある野菜とのことで柔らかく、味もあっさりしており好評でした。これはポリフェノールたっぷりの野菜で、動脈硬化、脳梗塞を防ぐため、抗酸化作用があり、また夏バテ予防に良いとのこと。真夏が旬の「苺菜(インチョイ)」を皆さまも試してみてください。

今回は初めて「カラOK大会」を企画。飛び入り参加で歌う方もあり、珍しい野菜や美味しい上海特別料理と老酒に舌鼓を打ちながら、会員相互の和やかな懇親となりました。

恒例のラッキー・ドロー特賞は、キャセイパシフィック航空のアジアマイル、コンラッド東京のホテル宿泊券、その他各種豪華賞品にて盛り上がり、熱気の中に再会を確認しました。



特賞キャセイ航空のアジアマイル当選の様

KANSAI

関西日本香港協会

関西日本香港協会理事・事務局長 戒田真幸

文化部セミナー開催

ネイルに魅せられて

関西日本香港協会文化部では、去る5月27日に香港貿易発展局大阪事務所のセミナー室において「ネイルに魅せられて」と題したセミナーを開催し、18名が参加しました。

講師の株式会社ヒサコネイル代表取締役山崎比紗子氏は1975年に美容界入りし、エステサロン経営、ネイル美



「ネイルに魅せられて」講師、山崎比紗子氏

容研究のため米国ロサンゼルス留学を経験されて1985年に西日本初のネイリスト専門校を開校し、多くの技術者を育成されてきたネイル業界の第一人者です。山崎氏は、現在ネイルサロンを展開する傍らトータルビューティーアドバイザーとして後輩の指導育成に注力しつつ、病院や介護施設でのネイルセラピーを実施され、日本ネイル界の発展と社会貢献に尽力されています。NPO法人日本ネイリスト協会理事・名誉本部講師、公益財団法人日本ネイリスト検定試験センター企画委員長、大阪樟蔭大学非常勤講師、日本セラピー研究会代表などの役職を務め、「指先からの美学」「爪110番」「爪美人」などの著書も多数あります。

山崎氏は講演の中で、まず「爪」は指先を保護し指に力を与える働きだけでなく、指先をきれいにすれば心が落ち着く癒しの効果があることを説明されました。ご自身の、人と人との触れ合いの中で「愛」を感じた感動の経験や、マザー・テレサさんの「人間が一番求めているものは触れ合い、言葉ではなく実際にどのように愛することができるか」の言葉に感銘されて、ネイル事業をネイルセラピーの領域に高める努力をしてられました。ネイルセラピーの効果として、「爪や皮膚のチェックによるヘルスケア」「おしゃれを楽しむネイルビューティー」「会話がもたらすメンタルケア」「スキンシップによるヒーリング」「機能増進による介護予防」について解説されました。

山崎氏の講演を通じて、ゆるぎない情熱と信念、惜しみない愛をもって周りの人を成功させたい、

お客様には優しく接してネイルで身も心も癒されて欲しいとの思いがひしひしと伝わってくるお話でした。ヒサコの魂の一滴として託された「昨日よりも今日、もっと美しく、優しく、人のお役に立てるように」との経営基本理念に基づいて実践してこられたご自身の生き方と事業の、純粋で高い志と実践力に感動された参加者が多かったと思います。弱者に厳しく自己の利益のみ追求している政治や会社経営が横行している世の中で、今回の講演は爽やかで清々しい気分になった有意義なセミナーでした。

「アジア・フォーラム in 沖縄」を楽しむ

日本が初めて主催する香港ビジネス協会世界連盟のアジア・フォーラム in 沖縄が、去る5月31日～6月1日に2000年7月にG8沖縄サミットが開催された会場の万国津梁館とザ・ブセナテラスで開催され、関西日本香港協会からは18名が参加しました。アジアのシンガポール・タイ・ベトナムの香港協会から参加された協会役員や、国内の日本香港協会各支部から参加された多数の皆さんとの交流を楽しみ、充実したプログラムに参加して沖縄の現状と将来、アジア経済における華人ネットワークの役割などを学んだ有意義なイベントでした。楽しかった思い出の写真を一部掲載します。



前夜祭でバーベキューパーティーを楽しむ



沖縄の名門コース、喜瀬カントリークラブで懇親ゴルフを楽しむ

CHUKYO

中京日本香港協会

南ア旅行雑感 -香港経由が便利-

中京日本香港協会事務局理事 大竹正男



チョベ国立公園サファリツアー



満開のジャガランダ=プレトリア

1. はじめに

4年余りに名古屋商工会議所退職を機に、妻と私が元気うちに海外旅行へ、とくに遠隔地で世界遺産のある地域を狙い、年平均3回のペースで出かけることとなった。

今回は昨年10月に訪問した南アフリカを中心に話をすすめたい。

過去を振り返ると、34年前、まだ国際部現役のとき、タンザニア・マダガスカル・セイシェルへ高級材輸入調査団に随行した際、アフリカはとにかく遠く、衛星状態も悪く、敬遠された地域との先入観があった。

それは①当時、フライトは英国航空(BA)で成田—香港—バンコク—コロンボ—セイシェル—ヨハネスブルグと各空港で給油し、1日近くの長旅であった。

②出発前に予防接種として、黄熱病、腸チフス、発疹チフス、天然痘、マラリアが必要であった。

③1週間以上滞在のため、ビジネスビザ取得に時間を要した。という時代であった。

しかし、今回は南アフリカが2010年サッカーワールドカップを経験したこともあり、①パスポートと入国カードのみで入国でき、フライトもキャセイパシフィック航空(CX)と南アフリカ航空(SA)共同運航で香港から14時間の夜行便でヨハネスブルグへ到着、大変便利であった。②今回、ビクトリアの滝が入っており、国が南アフリカ、ザンビア、ジンバブエ、ボツワナ、ナミビアの5ヵ国でありながら、10月ということもあり、予防接種は必要でなかった。

さらに、過去と今の共通点は宿泊ホテル・ロジはまず快適であり、食事日本食こそないが、西洋、中華、地元料理を美味しくいただけた。

このことから、アフリカに対する感触は隔世の感があり、その進展ぶりに驚いた次第である。

2. 観光

以下、訪問都市、地域の印象を紹介する。

① ケープタウン

世界史で学んだヴァスコ・ダ・ガマの発見した喜望峰—アフリカ最南端といわれている—の見学をはじめ、

テーブルマウンテン、テーブル湾サンセットクルーズ、カーステンボシュ植物園など観光都市であり、大いに堪能できた。

② ヨハネスブルグ

経済中心都市であり、工場地帯、商業施設も多く見られた。観光はソウェットツア—に乗り、ネルソン・マンデラの家、ヘクタ・ピーターソン博物館など訪問できた。

また、市全体が治安が悪いとの情報を得ていたが、私には一部地域のみに限られているとの感じがあった。

③ プレトリア

首都で政治中心都市であり、大統領府、国会議事堂、各国大使館が立ち並ぶ、静かな町との印象があった。この10月下旬は、ジャガランダの薄紫色の花が満開で、街路樹に山並にとともきれいであった。さしずめ、日本の4月、桜の満開に匹敵すると感じた。

④ ビクトリア・フォールズ

世界3大フォールズの1つで世界遺産となっており、4ヵ国—ザンビア・ジンバブエ・ボツワナ・ナミビアを観光ルートに乗り、視察でき、その雄大さを満喫できた。

また、同地域には、サファリツアーがあり、ひとつはチョベ国立公園ポートサファリツアー、ひとつはジープによるサファリドライブと川と陸の両方から楽しむことができ、大変よかった。

ひとつ厄介だったのは、4ヵ国の出入国の際、ビザがそれぞれに必要であり、時間が多少かかった点であった。

3. 経済

観光目的であったので、経済については詳細にはみていないが、本年6月のアフリカ開発会議(TICAD於横浜)でも宣言されたように今やアフリカは今後、経済成長が見込める地域であることから、「援助から投資」への時代と位置付けられている。

とくに、南アフリカはまだ資源が豊富であり、天然ガスなどエネルギーも産出されることから、今後の投資先として、おおいに期待できると確信した次第である。

KYUSHU

九州日本香港協会

平成25年度通常総会・講演会・懇親会開催

九州日本香港協会事務局



石原進会長



香港貿易発展局・古田茂美日本首席代表による講演

九州日本香港協会では去る7月4日(木)にグランド・ハイアット・福岡2階「サボイ」において、平成25年度通常総会・講演会・懇親会を開催しました。来賓として香港貿易発展局より日本首席代表の古田茂美様、大阪事務所マーケティング・マネージャーのリッキ・フォン様、東京事務所コーポレート・コミュニケーション&マーケティング・オフィサーの米岡哲志様の3名をお迎えしました。

通常総会に先立ち、香港貿易発展局の古田茂美様より「香港と九州の密接な関係について」という題目で講演が行われました。講演では、九州日本香港協会のこれまでの国際活動展開及び5月31日～6月1日に沖縄で開催されたアジアフォーラムへ訪問団を派遣した模様について紹介いただいたあと、濱下武志教授による「東アジア史における九州の位置」及び、香港中華総商會が行った初めての訪日ミッションは九州であったこと等の説明がありました。このほか、9～10月に福岡市内で予定されている九州ビッグバン事業についての説明がありました。古田様の豊富な経験や知識に基づく講演に、多くの会員様から感謝の言葉をいただきました。

続いて、56名(委任状出席を含む)の出席を得て、通常総会が行われました。会長挨拶のあと、第1号議案「平成24年度事業報告および収支決算(案)について」、第2号議案「平成25年度事業計画および収支予算(案)について」、第3号議案「役員を選任



懇親会の様子

について」の3議案について満場一致で可決・承認されました。議案審議のあと、この1年間に新規入会された会員のうち、当日ご参加いただいた法人会員の株式会社フジコー、株式会社AGSコンサルティング、個人会員の田中聡一郎氏の計3名をご紹介します。

総会終了後、隣の「レッドローズ」に場所を変えて懇親会を行いました。石原会長、香港貿易発展局の米岡様のご挨拶のあと、並田名誉顧問による乾杯で幕を開け、活発な交流が行われました。最後に佐々木副会長の閉会の挨拶で楽しかった懇親会を終了しました。

昨年度は会員数が68のままで停滞したことを踏まえ、今年度は会員満足度を高める事業を行うことで、新規会員の入会を促進していく所存です。

YAMAGATA

山形日本香港協会

順徳聯誼總會伍冕端小学の生徒が日本語スピーチコンテストに出場

山形日本香港協会理事 リブネ宮崎紀子



日本語の授業風景

香港の元朗地区にある順徳聯誼總會伍冕端小学は2004年から一貫して小学6年生全員を対象に必修科目として日本語の授業を行っている。香港でも数少ない日本語教育に積極的に取り組んでいる初等教育機関である。2001年に新設され、校訓は孔子の『論語・述而篇』から「文、行、忠、信」と定めている。系列校の順徳聯誼總會翁祐中学は2002年から継続して必修科目として中学1年生から3年生を対象に日本語教育を実施してきており、伍冕端小学の卒業生の85-90%は翁祐中学へ進学し、日本語学習を続けている。滞日経験も豊富で、日本語能力試験に合格している教師3人が英語や中文などと兼任で日本語科目を担当している。学校のオリジナルの教材を整え、授業ではパワーポイントを使用し、生徒に人気が高いアニメや漫画などを取り入れながら日本語の指導をするほか、童謡や日本食など日本文化の紹介も積極的に行っている。

今年、学校にとって大きな出来事があった。4月に開催された第9回香港小中高生日本語スピーチコンテストに初めて生徒が出場したのだ。香港の日本語教育関係者の学術団体である香港日本語教育研究会の主催



ひらがなカードを使っているグループワーク

により、在香港日本総領事館、国際交流基金及び日本のNPO法人Education Guardianship Groupの後援、CANONや全日空、日本航空、香港日本人商工会議所、香港日本人倶楽部、香港日本文化協会、香港留日学友会などの協賛で実施された。第8回までは中高生のみを対象に行なわれてきており、今年初めて小学生部門が設けられた。伍冕端小学からは6年生の李樂榆さんと劉慧儀さんが出場した。

日本語科目を担当する馬南教諭は学校としてスピーチコンテストへの参加を決めた理由について、「香港では小学生が参加できる日本語関係のイベントがあまり多くなく、将来の展望を広げるために生徒に呼びかけた。生徒にとってもっと深く日本語を知る良い機会になったと思う」と述べた。また、スピーチの指導上の工夫などについては、「2人の生徒に日本語の詩の朗読を指導したが、私自身トレーニングを受けた経験がないので、指導の技術がわからなかったし、また指導法についての資料や情報を得るのも難しかった。でも、私も生徒達も楽しんで練習できたと思う」と振り返る。

二回戦に出場を果たした李樂榆さんは、「日本語が好き。だから、先生が私に話をくださった時、出場しようと思った。毎日先生に発音を指導していただいたり、家族からも応援を受けながら準備を重ねた。当日はとても緊張した。結果にはちょっとがっかりしたけど、参加してみてもっと日本語が上手になりたいと思うようになった。これからも日本語の勉強を頑張ります」と話した。また、コンテストでは香港柔道館の岩見龍馬氏から柔道について話を聞いたり、クイズを楽しむ時間も設けられ、李さんは日本への知識を深めたという。「日本の飲食文化が好き。東京タワーを訪れたり、銀座へ買い物に行ってみたい。将来は観光や芸能関係の仕事に日本語を活かせたら良いな」と夢を語った。

馬南教諭は結果を踏まえての今後の課題などについて、「1人の生徒が二回戦に進んでくれて、嬉しかった。結果的に入賞はできなかったが、彼女にとってこのコンテストへの参加は貴重な経験だったと思う。生徒にとって日本語を学ぶ本当に良い機会だと思うので、今後も参加を継続していきたい」と語る。今後の生徒達の飛躍に大いに期待したい。

HOKKAIDO

北海道日本香港協会

「香港金融セミナー」を開催

北海道日本香港協会 事務局



セミナー会場の様子

北海道日本香港協会は、6月3日(月)に香港貿易発展局が札幌で主催した「香港金融セミナー」に共催いたしました。

本セミナーは、「『人民元の国際化』金融・貿易センターとしての香港の役割」と題し、香港貿易発展局が5月29日(水)に東京、6月3日(月)に札幌で開催したものです。札幌で香港についての金融をテーマとしたセミナーの開催は今回が初めてとなります。北海道日本香港協会と北洋銀行が共催、北海道経済産業局、北海道、札幌市、札幌商工会議所、北海道国際ビジネスセンター、ジェットロ北海道の後援をいただき、盛況のうちに開催することができました。

人民元の国際化を受け、大中華圏へのゲートウェイとして香港の役割はますます多様化、高度化し、新たなビジネスチャンスが期待されています。札幌での金融セミナーでは約100名の方々が参加され、人民元の国際化に対する関心の高さ、また金融センターとしての香港への期待の大きさが感じられました。

セミナーに先立ち、香港貿易発展局日本首席代表 古田茂美氏より主催挨拶、日本銀行札幌支店長 曾我野秀彦氏より来賓挨拶をいただいた後、3名の講師の方々よりご講演いただきました。

基調講演では、株式会社北洋銀行取締役会長横内龍三氏より「グローバル時代の北海道の進路～香港そして中国への海図～」と題し、ご講演いただきました。グローバル時代においては、日本そして北海道においても世界との境界線がなくなり、競争が激化することを踏まえ、強固な経済戦略を構築する必要性を語られました。中でも、北海道については「食」や「観光」の分野を新たな産業として世界に発信していくと、今後の北海道の進路を示されました。また香港については、中国との関係を改善していく上においても今後ますます重要な役割を果たしていくとお話されました。

続いて、HSBC投信株式会社代表取締役社長 松田宇充氏より、「人民元の国際化の将来」についてご講演いただ



3名の講師の方々にご来賓の皆さま

きました。2005年の管理変動相場への移行後、人民元の国際化は急速に進み、2012年には中国の貿易決済の12%が人民元建になっています。今後、2015年にはアメリカドル、ユーロに続き世界第3位の貿易決済における国際通貨になると見られており、この著しい成長には日本としても学ぶべき点が多いとお話されました。また、香港のオフショア人民元預金は2013年3月までに、6,680億元に達し、流動性リスクも軽減され、人民元の国際化は着実に進展しています。中国の人民元建貿易決済のうち90%が香港の銀行による決済であり、人民元貿易決済センターとしての香港の役割は年々重要性を増しているとお話されました。

丸紅株式会社丸紅経済研究所シニア・エコノミスト 鈴木貴元氏からは、「中国の高度経済成長の転換と金融の役割」と題して、ご講演いただきました。中国経済は投資と輸出により高度経済成長を続けてきましたが、リーマンショック後、中成長への「移行期」に突入しています。習近平体制では、第12次5か年計画における産業構造改革に示されているように、省エネ、バイオ、新エネルギーなど7つの戦略性新興産業およびサービス業の発展による経済の成長を目指しています。2030年までには経済規模で米国を凌駕する可能性があり、経済改革において金融が大きな役割を果たしているとお話され、経済規模に見合うシステムの構築は不可避であり、人民元の国際化は重要なファクターであると強調されました。また中国各地域の経済規模を考えると、今後ますます国内地域間、国内・海外間で多様な金融取引の発展、自由化の加速が見られるだろうと語られました。

セミナー終了後には、香港貿易発展局のご担当者による「香港進出相談会」を実施しました。香港ビジネスに関するご相談に対し、個別に最新の情報提供やアドバイスをいただき、「知りたかった情報を得ることができた」等、ご参加された道内企業の皆さまにも、ご満足いただくことができました。

MIYAGI

宮城日本香港協会

宮城日本香港協会 事務局 武田 功

2013春節セミナー&パーティーを開催しました



サリー・ウォン氏からの来賓挨拶

2月26日(火)17:30から2013春節セミナー&パーティーをパレスへいあんに於いて開催しました。寒い中、70名もの参加者を得て、香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部首席代表のサリー・ウォン氏を来賓に迎え、盛大に開催することができました。

佐々木会長の挨拶で幕を開け、県国際経済・交流課長千葉章氏、香港貿易発展局東京事務所長ジョイス・チャン氏の祝辞の後、香港で居酒屋「陣屋」を運営するドラゴンホース有限公司社長の永窪威氏により、「激化する香港のレストランの実像」と題して、約40分にわたって講演がありました。苦境に立たされたとき、如何にして立ち上がり、現在の「陣屋」を軌道に乗せることができたか、体験を交えながら、そして香港の人となりを紹介しながら、プロジェクターを使ってわかりやすく説明してくださいました。その逞しい行動に聴講者から「なるほど!」と、賛同の拍手が寄せられ、有意義なセミナーとなりました。第2部は春節パーティーです。小野寺代表理事による挨拶、伊藤敬幹副市長の挨拶の後、香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部首席代表のサリー・ウォン氏による祝辞がありました。通訳を介しながらではありましたが、震災に苦しむ宮城の復興に少しでも役に立ちたいと、その気持ちの一端を、ユーモアを交えながらスピーチされました。



サリー・ウォン氏・伊藤仙台市副市長とともに

平成25年度通常総会&記念セミナー、懇親会を開催しました



佐々木会長からの最後の挨拶

5月23日(木)17:30からパレスへいあん3階「グレースホール」において、2013年度通常総会&記念セミナー、懇親会を開催致しました。来賓として、県国際経済・交流課長の山崎敏幸氏、仙台市国際プロモーション課長の高橋輝氏、そして香港貿易発展局東京事務所長のジョイス・チャン氏にご出席頂き、78名(委任状出席を含む)の出席を得て行われました。会長挨拶のあと、県知事、仙台市長の祝辞(代読)に続き議事に入り、第1号議案「2012年度の事業報告並びに収支決算及び監査報告」、第2号議案「2013年度事業計画(案)及び収支予算(案)」、第3号議案「役員改選」の3議案について満場一致で可決・承認されるとともに、直後開催された理事会において、小野寺初正会長以下新体制が決定され紹介されました。そして、辞任される佐々木会長には池田女性部会長からの花束贈呈があり、退任の挨拶がありました。

続く記念セミナーにおいては、Total International Ltd.代表取締役の山野辺剛氏による「日本食材における今後の香港マーケット」と題した講演がありました。氏いわく「日本食レストランは、今までは開店すれば“お客が来る”“儲かる”“香港人のステータス”であったが、今後は“戦略”と“資金力”の時代へと突入した」と。淘汰される時代を迎え、如何に香港の客層を掴むかが課題といえそうです。



総会・セミナー会場風景

OKINAWA

沖縄日本香港協会

沖縄日本香港協会



アジア・フォーラム会場

香港貿易発展局・香港ビジネス協会世界連盟が主催するアジア・フォーラムIN沖縄が5月31日(金)沖縄県名護市の万国津梁館で開催されました。青い空と大海原に抱かれた万国津梁館は、2000年にサミット先進国首脳会議がアメリカのクリントン大統領やイギリスのブレア首相、フランスのシラク大統領をはじめ8か国とEUの首脳をはじめ多くの要人を迎えてきました。アジア・フォーラムには日本全国の日本香港協会をはじめ、香港、ベトナム、タイ、シンガポールからも多くの会員が参加し、会員相互の交流を図ると共に、沖縄とアジアの歴史や経済状況、地理的優位性を生かした今後の可能性などが提示されました。

アジア・フォーラムの冒頭で、日本香港協会全国連合会の國場幸一会長は、「日本で初となるアジア・フォーラムが沖縄で開催が実現できて嬉しく思っています。沖縄は、日本とアジアの真ん中にあります。今後更に積極的にアジアの国々の発展に協力していきたい」と挨拶しました。

その後、香港・日本経済委員会のジョナサン・チョイ氏やENグループ代表又吉真由美氏の挨拶・講演が続いた。

ジョナサン・チョイ氏は、那覇空港のANA貨物ハブを例に挙げ、「沖縄はアジアの地理的優位性を生かし、今後ますますの発展が期待される。」と挨拶されました。

沖縄出身で、香港・シンガポールなどアジアを中心に、飲食店を展開するENグループの又吉真由美代表の講演をいただきました。

インターナショナルミーティングでは、琉球大学名誉教授嘉数啓氏が「沖縄の振興発展とアジア諸国とのビジネス連携」と題して講演しました。

その後のディナーレセプションの前段では、中国中山大学 アジア太平洋学院 学院長・教授の濱下武志氏から「アジア経済におけるチャイニーズネットワーク」



ディナーレセプション

と題し講演をいただき、その後、沖縄科学技術大学院大学副学長パトリック・ビンセント氏から「世界最高水準の科学技術の研究・教育」を目指す沖縄科学技術大学院大学の概要説明を行った後、アジアからの研究生からの、研究テーマについての発表がありました。

ディナーレセプションでは、空手や沖縄の伝統太鼓「エイサー」の演技を見ながら懇親を深めました。

翌日は、世界規模を誇る「沖縄美ら海水族館」へのエクスクーリションや懇親ゴルフが行われ、沖縄の美しい自然に触れながら、親睦を深めました。

飛龍 No.74 2013年8月 発行

(禁無転載)

日本香港協会 全国連合会

〒102-0083 東京都千代田区麹町3-4 トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局 東京事務所内
電話(03)5210-5901 FAX(03)5210-5860

NPO法人日本香港協会(東京)

〒102-0083 千代田区麹町3-4 トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内 電話(03)5210-5870

関西日本香港協会

〒541-0052 大阪市中央区安土町2-3-13 大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内 電話(06)4705-7030

中京日本香港協会

〒460-0003 名古屋市中区錦2-11-27 TH錦ビル8階
株式会社喜森内 電話(050)3620-2517

九州日本香港協会

〒812-0011 福岡市博多区博多駅前2丁目9-28 会議所ビル1階
地域企業連合会 九州連携機構内 電話(092)451-8610

山形日本香港協会

〒990-2432 山形市荒橋町1-14-21
(株)日本不動産コンサルティング内 電話(023)633-2110

北海道日本香港協会

〒060-8661 札幌市中央区大通西3-11
北洋銀行国際部内 電話(011)261-4288

宮城日本香港協会

〒980-0811 仙台市青葉区一番町3-7-23 明治安田生命仙台一番町ビル3階
(株)JTB東北 交流文化事業部内 電話(022)212-5552

沖縄日本香港協会

〒900-0033 那覇市久米2-2-10
那覇商工会議所内 電話(098)868-3758

広島日本香港協会

〒730-0052 広島市中区千田町3-7-47 広島県情報プラザ3階
(公財)ひろしま産業振興機構 国際ビジネス支援センター内
電話(082)248-1400

新潟日本香港協会

〒951-8052 新潟市中央区下大川前通四ノ町2186番地
愛宕商事株式会社内 電話(025)365-0001

URL <http://www.jhks.gr.jp>

HIROSHIMA

広島日本香港協会

平成25年度 通常総会・講演会・交流会

広島日本香港協会事務局 黒永 康太郎



通常総会の様子

広島日本香港協会では、去る5月17日(金)に平成25年度通常総会・講演会・交流会を開催いたしました。ゲストとして、香港貿易発展局・大阪事務所の伊東正裕所長ならびに田中洋三次長にご出席いただき、31名(委任状48会員提出)の出席を得て行なわれました。当協会の深山英樹会長より「今年度も香港や中国本土への事業展開を検討する会員企業の皆様には、香港貿易発展局の支援による、ビジネス・アドバイザーサービスやビジネス・マッチングなどの会員支援サービスを積極的にご活用いただきたい」とのご挨拶をいただいた後、「平成24年度事業報告及び決算報告」、「平成25年度事業計画案及び予算案」について、事務局よりご説明を行い、全議案とも満場一致で承認され、滞りなく終了しました。

続く講演会におきましては、当協会会員である長沼商事株式会社の豊口治基氏を講師としてお招きしました。同氏は、同社が昨年の10月に設立した香港法人「長沼(香港)有限公司」の総経理であり、『香港法人設立を通して学んだこと』と題し、大変貴重な講演を行っていただきました。香港法人設立のきっかけから始まり、香港貿易発展局のビジネスアドバイザーサービスを利用したことで、香港についての有効な情報収集や手続きが可能となり大変感謝されている事、まだまだ課題は多いが様々な方の力を拝借しながら今後の



アジアフォーラムについて説明する田中洋三次長

法人発展につなげていきたいといったご講演に、会場にいる会員の皆様も熱心に耳を傾けておられました。

この後、田中次長より改めて日本香港協会のご説明ならびに去る5月末に日本で初めて行なわれた「アジアフォーラムin沖縄」開催のご案内をしていただきました。

また、通常総会、講演会の後に開催した交流会では、伊東所長、田中次長にもご参加いただき、両氏と会員の皆様にて和やかな雰囲気での交流となりました。冒頭では、4月19日(金)から5月12日(日)の24日間にわたり、広島にて大成功を収めた「広島菓子博2013」の実行委員会の事務総長でもある、株式会社イトーの伊藤學人社長より「菓子博を是非香港で開催してみてもは」という大変力強いご挨拶をいただき、会の最後では田中次長より「昔、広島県民が北海道やハワイに向けて移住を行なったバイタリティにならい、香港を初めとする世界各国へ更なる事業展開を目指していただきたい」と締めのご挨拶をいただきました。

今年度におきましても、当協会事務局として講演会やセミナー等を積極的に企画・実施していく事により、協会会員の中から1社でも多く、香港貿易発展局の各種サービスを活用され、香港をパートナーとした海外での事業展開がなされることを期待しております。

NIIGATA

新潟日本香港協会

新潟日本香港協会事務局

新潟日本香港協会が設立



乾杯の音頭を取る新潟市の篠田市長

新潟日本香港協会は、新潟の産・官・学が三位一体となり、民間企業・学校法人を中心に幅広い事業分野を持つ会員によって、2013年3月27日に設立致しました。会長は株式会社新潟クボタの吉田至夫代表取締役社長が務め、役員には新潟県知事を初めとし、新潟を支える財界人、学識経験者の方々を迎えスタート致しました。事務局には愛宕商事株式会社が務めております。5月末現在の会員数は法人会員94団体、個人会員17名になります。

3月27日の設立総会では、100名を超える会員の皆様にお集まり頂き、協会規約、役員選任、平成25年度事業計画及び予算が満場一致で承認されました。続いて行われた講演会では香港貿易発展局古田茂美日本首席代表に「アジア・中国市場進出の課題と展望～華人経営と事業戦略の考え方～」と題し、お話を頂きました。香港へ事業展開したい、または香港をハブに中国本土へ進出したいといった考えを持っている企業には大変貴重な講演となりました。その後に開催された設立祝賀パーティーでは、古田代表をはじめ、中華人民共和国駐新潟総領事王華様からもお祝辞を頂きました。今後の協会に対する期待や励ましのお言葉を頂き、協会の設立にふさわしい華やかなパーティーとなりました。



設立総会の様子

香港ビジネスセミナーを開催



昼食講演会の乾杯

協会が設立されてから初めての後援行事として、6月10日に香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部主催の昼食講演会「香港－発展のパートナー」や香港貿易発展局主催の「新潟県香港ビジネスセミナー」が行われました。

昼食講演会では香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部首席代表のサリー・ウォン様の基調講演をはじめ、観光・金融など多方面から経験に基づいた貴重な講演をお聞きすることができました。その後の香港ビジネスセミナーでは、「食品」・「テクノロジー」・「ハウスウエア」と3つの産業に分かれ、事例を交えながら総合的なアドバイスを頂きました。

今後の当協会の活動と致しましては、当協会も共催で行われる「ユニー香港の店舗内で行う新潟物産展」、そして、にいがた産業創造機構を通じ8月13～15日に行われる「Food Expo」への出展支援、11月7～9日に行われる「香港インターナショナル・ワイン&スピリッツフェア2013」へ新潟県・新潟市・新潟県酒造組合と連携し、日本酒の出展を予定しております。

「米どころ」と言われる新潟ですが、会員の中には海外市場に活路を見出したいと意欲を持つ農業生産者が多数入会されております。

こういった会員の皆様は香港へ、または香港をハブとした中国本土、近隣アジア諸国への進出の一役を担えるよう、協会の運営に万全を期していきたいと考えております。